

第二次建設



新ダイヤ積出す宵はおぼろ月

二月十一日操業開始以来貴重なる石灰石は広畑製鉄所の危急を救うべく毎日毎晩広畑へと送り出された。

然し当初は例の油野川橋梁のコンクリートストラブの硬化期間が日なお浅いために橋梁の上を足立駅より貨車一輛づつ、手押で押入れ押出しをして随分無理な出荷を続けたものであった。漸くコンクリートの完全硬化を待つて機関車の試運転となつたのが春浅む三月の八日であった。

機関車試運転の結果は上々。茲に列車は本格的ダイヤへと切換えられて、三月十日当時の陸軍記念日を期して足立―飾磨間の新ダイヤによる計画輸送は開始され、定時から定時へ埒々長蛇の如き貨車は毎日毎晩石灰石を満載しては広畑広畑へと繰出されて行った。

梅一輪一輪づつの暖かさにつれて日増しに草木

も春の芽生えに萌出る頃、積出し作業も順調に続行されては行つたが、何分採掘より碎石、貯石に至るまでみんなが仮設備なので、之が急速なる完成へと建設は息つく暇もなくそのまゝ、第二期工事へと更に拍車を掛けられたのである。

営業と建設、それはまことに文字通り、盆と正月が一緒に來た様なもので其の忙しい事全くお話にならない。

三度めぐり来る春四月。村人たちが飲んで山よ桜よと花見遊山に浮かれている時分、清水組の手によつてよろける程苦勞して掘鑿を終つた碎石工場敷地切取のあとへ、鉄道側線工事を終つた鹿島組よりそのまゝ、残つてくれた鈴木組の手によつて碎石工場機械設備の基礎工事は直ちに開始された。

此の頃一方では川西組によつて、漸く張石工事と土留擁壁工事のすんだ貯石槽の上家の建築へと駒を進めた。貯石一万五千疋を誇る貯石槽の上家

だけに、屋根坪三千平米を数える宏大な上家だけに川西組も更に張切って着工したのが五月の半であった。

基礎工事やトラスの切込等を終えて合掌組立て、建起しへと進んだのが七月、焼けつく様な真夏の太陽をともに受けて、炎天下汗と油で真黒になつて上家とコンベヤーガーダーを兼ねた宏大なトラス合掌は、ブラント寄りから一スパン毎に順次に建起されて行った。

* * *

ほととぎす鳴きつる丘の山開き

当時の採磁はブラントのすぐ後の所謂正面採掘場を採掘して、磁車に積まれた石、灰石は手押しによつて、すぐセミ・チップラーで半転してはシュートによつてフレイクラッシャーに流れ込む様にしていた。狭い丁場で手押しの距離もまだ近いので磁車は常に衝突し合う様にして先を争うては

セミ・チップラーに殺到したものであった。

正面採掘場はブラントは勿論部落に一番近い。しかも南向きと来ているので部落へ真正面で、部落を眼下に見下した丁場での発破作業は実に苦勞したものである。発破孔の向きを少々変えて見ても、濡れ藁を少々掛けて見たところでもどうしても石が飛ぶ。小石ながら飛んで来ては屋根瓦を破り散らす。当時は発破のために毎日部落におこわりの挨拶に廻り歩くのが一仕事であった。毎日ドカンノと発破の音がしきえすればきまって屋根壊しのおこわりに駆け歩いたもので、それが『どうもすみません。以後気をつけますから……』とおきまりの文句を言つて毎日おこわりに廻るのだから実に始末の悪いものであった。

こうして苦難の採磁を続けていた正面採掘場も、山は低いし丁場も狭くしかも漸く表土のために悩まされる様になって、オロ谷隧道工事の進捗してない当時としては必然的に第二丁場として鳩丘

採掘場の開丁となつたのである。

そして小鳥さえずる物静かなる谷鳩丘も、谷から谷へコダマする発破の轟きに瞬時に修羅場と化し、あまたしく山開きは始められ開丁工事は急がれた。

之に呼応して鳩丘丁場の推進力としてコンプレッサーは再び道なき道を運搬されて、鳩丘に第二コンプレッサーが運転され出したのはほととぎすの声もめずらしく声える五月の初旬、このコンプレッサーの運転によつて鳩丘採掘場も漸く順調の途についたのである。

標高三八〇米の鳩丘採掘場は正面ブラント上部レベルより二〇米高い。この二〇米の落差をどうして原石を運ぶか、問題になったが、簡単に機械設備が出来るわけもなく取あえず二段積によつて正面のチップラーまで運ぶ事になった。そして隧道の入口附近の斜面と広場を利用して仮貯石場は作られた。(註 当時鳩丘の二段積というのは上

段の鳩丘軌道レベルより斜面に原石を落して、斜面の下隧道レベルに石垣と木の梁による平面的貯石場を設けて其の下に磁車を押込んで木の梁を取外しては落し積にして正面まで運んでいた。)鳩丘丁場の運磁は上段を梅田組により、下段を清水組によつて正面採掘場の緊急応援として正面に運ばれたが、何しろ機械設備のない悲しさをこの様な原始的な運搬によつて困難な増産を続けて行かねばならなかった。

* * *

ブラントに紅葉散りけり試運転

予て東京の大塚工場に注文製作中のクラッシャー(チャイレートリーハ番型)も、はじめの一台が出来上つて八月になって到着した。今度は既に側線が出来ていたので事務所前まで貨車積のまゝ、押込んで、宮井組によつて貨車卸しより運搬へ取か、つた。

幾つにもばらしてはあつても何しろ巨大な図体だけに運搬もなかなか容易ではない。しかも掲揚軌道敷の傾斜二〇度に及ぶ急傾斜面の重量物運搬の事として慎重を期した宮井組としても其の苦勞は並大ていではなかった。

辛苦幾十日、漸くにして全部を運び終ったクラッシャーは、鈴木組によつて既に完了していた基礎へ直ちに据付にかゝり機械係員によつて組立てられて試運転へと進んだのが既に四方の山々も黄色に染み初めた十月の半であつた。全備重量四十有余吨。碎石能力毎時一五〇吨を誇るクラッシャー据付工事も茲に無事終了した。

クラッシャーの据付と併行してチップラー、チェーンフキダー、トロンメル等も次々に据付けられて、漸く半分程出来上った貯石槽の上家に最後のベルトコンベヤーを架設して総合試運転を終ったのが秋風も一入身にしむ十一月。当時まだ上家のない碎石工場プラントの試運転の機械設備の上

には正面の山の紅葉がちらちらと散りかゝつて、足立ではもう冬の季節には入つていた。

かくしてプラントの半分は出来上り、半分がら裕に一日千吨以上を処理し得る設備となつて、二月以来仮設備にて苦勞に苦勞を重ねて来た作業も碎石、貯石に關しては一貫した機械力に切換えられて全く軌道に乗つたのである。

続いて大塚工場より第二号クラッシャーも到着し、行き交う人の足どりも忙しそうに師走の空も押迫る頃、再び宮井組によつてこのクラッシャーも運転にかゝり、運搬途中にして意義深い昭和十七年を送ることとなつた。

* * *

圧縮機運ぶ谷間は葉の紅く

この頃一方隧道工事では、岩崎組が隧道入口より地盤の悪い数十米の間の支保工に悩まされ、幾度も幾度も隧道を潰しては失敗して、遂に腰を折

つて引上げたのが十六年の暮であつたが、それ以来隧道工事も一時工事中止のやむなきに至つていたが、そのあと東京から梅田組が新たに工事を請負つて入山した。

鳩丘の飯場をはじめ準備全く整つて再び隧道工事に着工したのが五月で、約半年近くも中止していたこの工事漸くここに継続される様になつた。そして潰れていた隧道も梅田組によつて支保工は進められ、切広めては二重支保工を施工して行つたが、何しろカブリは浅く最初の間坑口附近は全くの土砂で鳩丘より湧き出て来る地下水のためにドロドロの土砂となつて、全く筆舌に尽せない苦心の支保工によつて坑道は保たれ、超突貫工事でコンクリートアーチ工事を敢行したのであるが、延長七百米に及ぶ隧道工事も坑口より最初の百米の間、コンクリートアーチを施工した区間はど苦心したものではなかった。

こうして苦勞した工事だけに隧道の進行もこの

支保工の区間で予想外に遅れてしまい、すっかり工程が狂つてしまつた。しかし隧道はどうしても急がねばならない。足立石灰の生命も一に懸つてこの隧道の完成にあるのだ。もっと大きな広畑製鉄所の運命が懸つてゐる。日本の鉄鋼の生命が懸つてゐる。すべての意味に於てこの隧道こそ生命線であつた。

最初から隧道は両方から掘進する計画ではあつたが、両口から掘るのには人をはじめすべての機械、資材が不足であつた。熾烈な戦時下余裕のあるものは一つもなかった。先づ主動力のコンプレッサーも二台とも正面と鳩丘で使つてゐるのでオロ谷口から掘進開始の日程が決らない。百馬力のコンプレッサー一台購うにも大変であつた。世は全くの機械難の時代であつた。百方苦心してやっと帝國鑿岩機会社より百馬力を購入出来たのがもう既に足立では木の葉の色づく頃であつた。

其の頃宮井組に吉川坂よりオロ谷採掘場まで谷沿いに人道を作らせていたが（当時はオロ谷にまだ動力がなかったので手掘によって岩盤を掘鑿して道路を作った。）丁度完成したので、直ちに又宮井組にこのコンプレッサーを運搬させたが、何しろ今度はほんとに道がないのでどうとう吉川坂より川の中を運搬することにした。秋の早い谷間に点々と紅葉する断崖の下を川の中をあっちに渡り、こっちに渡りして水の中につかりながら坂道を掛けては重量物を運んだものであった。

運搬から据付へと随分急いだものだったが、据付を終えて試運転する様になったのは丁度クラッシングプラントの試運転と同じ頃、寒さの早いオロ谷は紅葉の時期も過ぎて、もうすっかり冬になっていた。

* * *

葉の落つる崖高くありダム工事

オロ谷は隧道を基点として上に五百米、下に千米しかも直立百米にあまる石灰岩の断崖を、千五百米に亘つての宏大な採掘可能区域であるが、崖高くして谷狭して表土や排土の捨て場がない。なんとしても一応は狭いながらもこの谷を表土と排土の捨て場に充てざるを得ない。しかし捨てた土砂を洪水等にて本流に流される事は絶対に許されない。之が防壁として砂防堰堤の急設は当然の事であった。

秋深み行くオロ谷に宮井組でダム工事にか、つたのはもう十月の末で、夜を徹して締切、根掘を敢行して、基礎コンクリートを打つ頃は陽の当たらない絶壁の下に落葉のみがカサカサと散りか、つてもう谷間の作業は寒かった。

狭い谷間には骨材の砂もなく、セメントや砂も遠く吉川坂より人道を一々肩で運んではコンクリ

ート工事を強行して最後のコンクリートを打上げたのは押迫った師走の空も鉛色に暮れか、つていた。

* * *

貨車に追はれ今日もビン掻く夜寒かな

其の頃一方営業の積出し作業では、日一日と熾烈になって行く戦争とともに石灰石積出しには益々拍車がかけられて、なんば掘って出しても間に合わない。貯石槽には原石が貯るひまがない。貯るどころか毎日毎晩空っぽの貯石槽を掻き廻るという始末で、折角苦勞して建設した大きな貯石槽もさっぱり役に立たない。当時は「こんな大きな容物（貯石槽）をこきえて何を貯めるのか」と人に笑われたものである。

毎日採掘場から出た原石もビン（貯石槽）を素通りして貨車に積込まれるといった有様を、殆んど毎晩私は有志を動員してビン掻きをやったもの

である。相手は鉄道でダイヤを組んだ列車だから雨が降ろうと雪が降ろうと、毎日毎晩きまつた時刻にはぎつちり貨車が入って来る。（戦時中広畑製鉄所行は足立―飾磨間専用列車であった。）

夜の列車は毎晩十時を過ぎて二十分頃側線に十二輛は入って来る。そして十一時には単機（機関車一台）で七輛持つて行く。あとの十五輛を補機（機関車二台）で午前一時に何れも足立駅の発車である。はじめの七輛が忙しいのは勿論のこと、あとの十五輛も遅くとも零時半頃迄には積込んでしまわねばならぬ。何しろ空っぽのビンを掻き廻って積込むんだから時間がかかること夥しい。汗だくになって必死になって原石を掻き込んで、たいてい一時の発車の間に合うか合わぬかのギリギリで何時も積込をすまして家に帰ってやれやれと一服するのはきまつて午前二時頃、寝に就くのは気の早い一番鶏の鳴き出す頃であった。

こんな具合に貨車に追いまくられた毎日毎晩の

連続の悲鳴のうちに漸く十七年を送る様になった。

* * *

棧橋修理大晦日の月の淡きけり

戦時中の合言葉はたゞ増産の一言であつた。すべてが増産であつた。しかも鉄鋼は国を挙げての増産である。鉄鋼増産は即ち石灰石の増産でもあつた。あの頃ぐらい増産にせまられた時はない。勝つか負けるかの天秤として増産は絶対的のものであつた。しかしオロ谷採掘場への隧道の完成へは日暮れて道遠しである。しかも鳩丘からの運磁が二段積ときは労多くして効少しで、この二段積運磁にはほとんど苦勞しきっている頃、漸く浪速機械に注文中のインクライン自転捲が出来上つて来た。川西組によつて鳩丘正面を結ぶ棧橋は夜を日に繼いで強行に架設され、機械基礎のコンクリートの硬化も待遠しく機械は据付られて、こゝに鳩丘インクライン自転捲の実現となつて、乱暴

ながらも鳩丘の磁車も其のまゝ、チップラーに運ばれる様になつて本格的増産へと一駒進める様になつた。

このインクライン自転捲は傾斜の棧橋(急な処は傾斜十度もあった。)の上を「つるべ」式に空車を下して、実車の重量で空車を引上げるのであるが、一廻半積の磁車を一度に四輛づゝも連結して下すので(一度に三輛づゝが限度であつたが回数)が時間の關係で限定されるので無理をして四輛づゝ運轉した。兎に角戦時中は無理をするのが当り前で、すべてが無理の連続であつた。棧橋の途中で磁車が行き交う時分は物凄いスピードでジャンジャン棧橋をゆすつて矢の様に下りて来る。鳩丘の機械の運轉手が最後のブレーキをかけるのであるが、たまにはブレーキが遅れると空車をそのまゝ、物凄いスピードのまゝ、いやという程機械の基礎にぶちつけて、磁車は目茶苦茶、ロープは切断と幾度こんな事を繰返したかわからない。又たまに

はすべり出した磁車(実車)にロープを連結する余裕がなく四輛連結の実車をそのまゝ、ぶつ飛して、伯備石灰の採石場までつき飛ばす様な事も度々であつて、兎に角乱暴極る運轉によつて増産を続けたものであつた。

たまたま十二月三十一日大晦日の夕暮、インクライン最後の捲卸しに運轉を過つて大事故を起し、棧橋を目茶苦茶に大破してしまつた。大晦日の晩ではあるしみんな人夫は帰つてしまふし仕方がないので私等職員が二、三人残つて徹夜して復旧作業をやつたが、どうとう棧橋の上で昭和十八年の元旦を迎え、初日を拜んで現場を下りたが全く事故に暮れて復旧に明けた新年ではあつた。

* * *

切取を急ぐ谷間や雪はこび

オロ谷第三コンプレッサの新設とオロ谷ダムの完成。それは最後の攻撃に対する陣地構築の完

了を意味した。そして隧道工事もオロ谷口の切取工事に総攻撃の火蓋は切られたのであつた。

コンプレッサの運轉開始とともに隧道口の切取工事に着工したのはもう十七年も余日なかつたが、明けて十八年。数尺に及ぶ積雪を排して工事は一日の休みもなく続けられた。坑口を開けるまでは絶対である。雪が降ろうと何尺積ろうと日和見は許されなかつた。しかし数尺に及ぶ全面的の雪を全部排雪するのは亦なかなか容易ではなかつた。雪の積つた日などは土砂運搬ならぬ雪運搬を幾日も続けなければならなかつた。

そして現在でもわかる様に隧道口はオロ谷を通じて一番表土が深く、しかもグサグサの岩盤で最悪の条件の箇所であつた。切取つても切取つても土砂混りのグサグサで坑口迄に予想以上の時日と工費とを費したのであつた。

又オロ谷第三コンプレッサの運轉は宿望のオロ谷開丁への大きなスタートでもあつた。

オロ谷開丁は隧道口の切取とともに全力をあげて着工されたが、此処にも一つの大きな障害があった。それはオロ谷を貫いて東西に絶えず流れている谷川である。水が流れている以上、又出水がある以上この谷を埋めてしまう事は出来ない。しかも谷川より屏風の様に屹立する百有余米の断崖の下には谷川をよけて丁場を造る事は絶対に出来ない。この谷川を如何に処理して丁場を造るか、大きな問題であった。そして洪水時まで計算に入れた大きな鉄筋コンクリートの暗渠にしてしまう設計まで立て、見たが、結局盲暗渠（大発破によって大きな岩石を下から累積して上部を目潰して埋立て、底部は岩石の間隙を常に水が流れる様にして埋立てた。）に決めて天地を震わす大発破の連発によってオロ谷の絶壁に挑みか、ったのである。

* * *

貫通の喜び溢る、ビールかな
隧道工事も十七年五月に再着工した鳩丘口からの掘進もコンクリートアーチ工事が完了してからは順調に進み出して、十八年五月には待ちかねていたオロ谷口からも坑道掘進には入る様になって隧道工事も愈々大詰になって来た。

しかしオロ谷口の工事が種々の障害に阻まれて意外に遅れたために隧道の過半は鳩丘口からの掘進となったのであるが、五百余米に及ぶ坑道を排気通風用の設備は何もなく扇風機一台も据えずに、発破のあと息もつけない硝煙の中を僅かに鑿岩機のエヤーによって局部的に切詰めの硝煙を散らしては強引に掘進を続けたもので、今から考えたら随分無茶な隧道工事であった。

隧道が深くなるにつれて測量も困って来た。それは隧道工が未熟練の上に加えて硝煙のため見透しはきかず測量も半月と怠ることは出来ない。一

すでも油断しているとんでもない方向に向って

しまう。レベルも何時の間にか上ってしまふ。しかも測量に坑内には入ってもけむってポールもスタフも見えぬ読めぬでこの硝煙のために測量もほとんど弱ったものである。そして全現場の工事を指揮監督していた私にはこの隧道の測量だけでも随分忙しい目に逢わされたものであった。

然しこうして苦勞して来た隧道工事も遂に喜びに溢れる朝は到来した。昭和十八年八月十五日、隧道導坑の貫通！この日の喜びこそは私にとつては一生忘れ得ないものであろう。測量の責任者として、工事の責任者としてこの時位嬉しいものはなかった。

延長七〇〇米の隧道も鳩丘口より五五〇米オロ谷口より一五〇米の地点に於て、八月十五日末期最後の貫通発破によって、に鳩丘とオロ谷は地下に結ばれ、全く貫通箇所が見分けられぬほど中心・高低共に寸分の違いもなく見事に貫通したの

であった。

この日、最後の測量によって十五日未明貫通予定速報により前日より入山待機をされていた社長を先頭に、貫通発破の硝煙の薄れ行く中をオロ谷口より流れ来る心地よき微風に歓喜の瞳をか、やかせながら通り初めを行ったが、社長以下みんなのこの日の朗らかな顔は今でも楽しい思い出である。

下山して社員寮に於て細やかながらも貫通祝の宴がもうけられ、あふれる喜びはなみなみとつがれるコップのビールの泡の様に、今でもこの時の喜びとビールの味を忘れる事が出来ない。

* * *

設立を寿ぐ春の雪しづか

オロ谷隧道導坑の貫通は隧道完成への大飛躍となり、又オロ谷開丁へも最後の拍車がかけられた。隧道後向掘進（切抜の掘進）も今迄とは、うっ

て変った排気通風の下で順調に進んで行った。

一方隧道の進捗につけて正面ではエンドレス捲機の新設が急がれる様になったが、東洋工作所に註文中の五〇馬力用エンドレス捲機がなかなか出来ない。当時はエンドレス捲位の機械一つ製作するのも大変であつて到底隧道完成までに間に合ひそうもないので臨時に二十五馬力用のエンドレス捲機を急契購入して兎に角間に合わせることにした。

この二十五馬力用の既製のエンドレス捲機でさえ足立に到着したのはもう正面の山の紅葉もすっかり散り果て、時折雪さえちらついていた。

幾多の苦難を乗り越えて最後のコースを突進していたオロ谷隧道工事も、最後にオロ谷口の支保工と隧道中央のコンクリートアーチの支保工との完了によつて再着工以来一年八ヵ月の貴重な日子を費して茲に輝かしき完成の実を結んだのである。時に昭和十八年十二月。大東亜戦争第三年目の年

の瀬も異常の緊張のうちに暮れようとしていた。

正面ではエンドレス捲機の基礎工事が急がれていたが、続いて上家も建築を終り、隧道の完成によつてオロ谷―正面間、〇〇〇米、複線のエンドレス幹線軌道を敷設して十八年を送る様になった。明けて十九年。

建設開始以来長い間、対外的にも地方、部落の人々からも静鉱業部として親しまれて来た足立石灰も組織変更の機運は漸く熟し十八年六月以来住友金属工業と合流の運びとなつて諸手続が急がれていたが、一月十五日株式会社設立の登記は完了し、其の名も足立石灰破産株式会社と社名を改められ、資本金参百万円の新会社として堅実な新しい第一歩を踏み出す様になった。

* * *

試運転^{かどで}首途の谷や冴え返る

正面のエンドレス捲機は超特急で組立てられた

が、附属設備のコンクリート工事等は雪降りしき一月の酷寒、零下十余度にも及ぶ悪天候をおかして強行された。そしてコンクリートの硬化期間も待てずに附属機械を取付けて、ワイヤーロープを張つて試運転したのがもう一月の末であつた。

一方オロ谷採掘場では現場の整備や、軌条配線とポイントの切換等に余念もなく、新しい運磁車は正面インクラインをウキンチで捲上げられて次々にオロ谷へと送られた。そして最後に正面操車場のポイントの切換を終つてオロ谷採掘場の採石準備は万端^{まんぱん}に完了した。

採石開始ノ エンドレス運転開始!!

真新しい運磁車はオロ谷採掘場の真白な原石を満載して一輛又一輛と連続的にエンドレスロープにかけられて堂々の行進は隧道を圧して整然と処女運転について行った。

かくて第一次建設着工以来四星霜、第二次建設着工以来即ち操業開始以来丁度二ヵ年、建設窮極

の目的であるオロ谷採掘場は茲に未来永劫足立石灰の誇りとして、其の双肩には広畑製鉄所を背負い、日本の鉄鋼界を背負つて日産能力二千吨、月産能力五万吨の機械設備と相俟つて名実共に日本一への大いなる首途を飾つたのであつた。

時正に昭和十九年二月十一日。足立石灰にとつては創業記念日。国を挙げての紀元の佳節。この佳き日に首途を祝うオロ谷採掘場の光栄と喜びは亦何にかたえん。

オロ谷採掘場よ幸あれノ
足立石灰よ永遠に幸あれ!!

終り

建設の想ひ出

昭和三十五年二月十一日 創業記念日発行

川島

